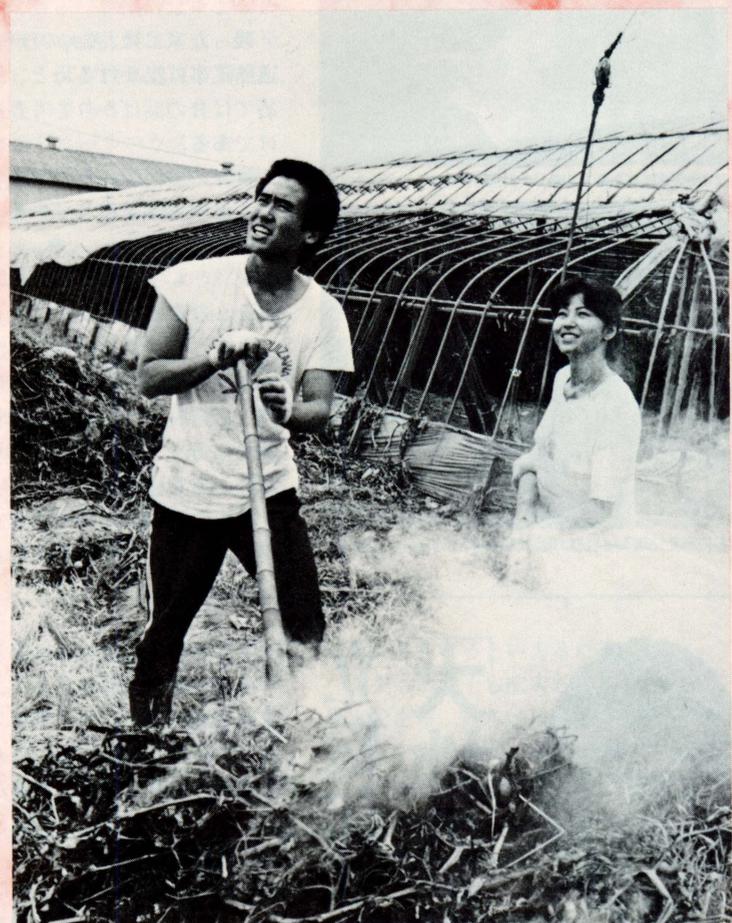


根岸吉太郎監督作品

遠雷

昭和五十六年度文化庁芸術祭参加



汗ばんだビニールが眩しかった。よく見れば微少な水滴一粒一粒が虹を含んでいた。ふくれて重みが支えきれなくなると水滴は涙のように流れ落ちた。そこから陽光が鋭く射してきた。大地の彼方に急速に流されていく雲が瞬間仄明るくなり、雷鳴が聞こえた。

自分の場所を見つけて……

新しい時代への自信と喜び

根岸吉太郎(監督) Ⅱ 荒井晴彦(脚本)の俊英コンビによる、作家・立松和平の、野間文芸新人賞を受けた同名小説の映画化である。

今、都市周辺の農村は新しい工業団地と住宅団地によって侵食され、ほんのしばらく前までは水田と栗林と雑木林だった土地が無防備のまま崩壊されつつある。この映画の舞台は、現代日本の風景の典型である、都市と農村がぶつかりあう境界線上の小さな農家であり、都市化の波に自己の生存基盤をおびやかされるながら、なおも「農」であり続けたいとして孤軍奮闘する青年(和田満夫)の物語である。

満夫はビニールハウスでトマトを栽培している青年だが、村はずでに解体され、かつての美田をしのぶよすががない。しかも変わったのはむろん風景ばかりではない。土地を売り、大金を手にして女遊びの味を覚えた父親。母親は満夫の仕事を手伝わず、道路工事に出てみんなど卑猥な話に愛さをはらしている。近所と競って新築した豪華な家の中は、ザラザラとほこりっぽい。祖母は在りし日の村ぐらしばかりしか語らず、会社員である東京の兄からはマイホームの資金の無心ばかり、といった具合である。

そんななかで、満夫は残った土地にしがみつづくようにトマトの栽培を続け、そのような正に「自分の場所」を失ってしまった人たちに反発し、意地になり、そして無念の想いを

遠雷・解説

かみしめながら、やがて一人(自分の場所)を見つけ直し、覚悟し、ようやく新しい時代への自信と喜びを覚えるのである。

いつかつで『狂った果実』など七本の作品歴を持つ根岸監督初の一般映画であるが、荒井晴彦の原作に忠実なシナリオをベースに、見事に「現代の日本」、「都市と農村」、「近代と現代が交錯した状況」を描き出したといえるだろう。今年三十歳で、撮影所出身の監督では最も今後が期待される一人である。撮影は『泥の河』の名カメラマン・安藤庄平、音楽は井上堯之が担当した。

主演の和田満夫役には『サード』で注目されて以来、売れっ子の永島敏行。「以前に原作を読んで感動し、やりたいと思ってました」と語った通り素晴らしい熱演を見せる。満夫の恋人・花村あや子役には「翼は心につけて」でデビューした石田えり。石田も事前に原作を読んで感動した一人で、前作とは全くイメージの異なる役ながら、新鮮で健康的な魅力をふりまいている。他に満夫の親友・中森広次役にジョニー大倉、『はなれ警女おりん』以来、五年ぶりに映画出演の横山リエ。そのほか、原泉、七尾伶子、ケイシー高峰、藤田弓子、蟹江敬三ら多彩な脇役陣が出演している。

カラー・スタンダード
上映時間 2 時間 15 分

スタッフ

- 企画 佐々木史朗
- 製作補 多賀 祥介
- 原作 立松 和平
- 脚本 荒井 晴彦
- 監督 根岸吉太郎
- 撮影 安藤 庄平
- 照明 加藤 松作
- 録音 飛田喜美雄
- 美術 徳田 暁博
- 編集 鈴木 晁
- 音楽 井上 堯之
- 助監督 (セントラル) 中 原 俊 弘
- 製作担当 栗原 啓祐
- キャスト
- 和田満夫 永 島 敏 行
- 中森広次 ジョニー 大 倉
- 花村あや子 石 田 え り
- カエデ 横 山 リ エ
- 満夫の祖母 原 泉
- 満夫の母 七 尾 伶 子
- カエデの亭主 蟹 江 敬 三
- 広次の母 根 岸 明 美
- 和田哲夫 森 本 レ オ
- 和田敏江 鹿 沼 え り
- 農協職員 江 藤 潤
- チイ 藤 田 弓 子
- 満夫の父 ケイシー 高 峰

- にかつ撮影所
- ニュー・センチュリー・プロデューサーズ
- 日本アートシアターギルド
- 提携

10月24日 土 寺ロードショー

特別ご鑑賞券(一般 ¥1200 学生 ¥1100) 好評発売中 (当日一般 ¥1500・学生 ¥1300)

国電有楽町駅 有楽シネマ (201) 3066
新宿 新宿ビレッジ2 (351) 3129

上映時間(連日/両館共通) 11:00/1:25/4:00/6:35





●母と共に土方をしている広次は満夫の子供の頃からの親友である



●満夫はあや子に、これからの自分の計画や夢を語るのだった



●結婚の約束をした二人はひたすら仕事に精を出す

あらすじ

和田満夫は、北関東の農村のビニールハウスでトマトを作っている青年である。ジーパンを穿き、髪にはパーマをかけ、仕事をしながらトランジスタ・ラジオでロックを聴く現代青年だが、満夫の長年住み慣れた農村には田畑を埋め立てて団地が建ち並び、平地はブルドーザーによって赤むけにさらされている。

土地を売った金で建てた立派な家に住んでいるが、家の中はいつもザラザラとほこりっぽい。しかも満夫の父は大金を手にして女遊びの味を覚え、家を捨ててパーの女・チイと同棲している。

兄の哲夫は、百姓を嫌って、サラリーマンとして東京に出ていった。

残った家には、満夫の仕事は手伝いもせず、道路工事に出かける母と、一日中ザラメをなめては昔の話ばかりをくり返す祖母がいるだけである。

日々の生活のいらだちの中で、満夫はもくもくとトマトを作っている。満夫は働き者なのである。

そんなある時、満夫に見合いの話が来た。まんざらでもないな、と満夫は思う。そのあや子も見合いのあとで、すぐにモテルへ誘うと結局はついて来るといった現代娘だが、満夫はあや子を見て、子供をペロリと産む女だな、とも感じた。

満夫の結婚話でやや明るくなった家庭に、突然、家出していた父が帰ってきた。宇塚先

生の選挙を応援するのだという。今までの父の浮気も責めずに、母までが、父を許している……。満夫の怒りがふくらむ。

広次は満夫の子供の頃からの友人である。今は道路工事の土方をしているが遊び好きだ。

その広次が、女と駆け落ちしたことを知った満夫はすぐにカエデであると思った。

カエデは、ビニールハウスの眼前に屹立している工業団地に住む女である。何度か満夫のトマトを買いに来たり、満夫と関係したこともあるが、その後すぐに広次とも結びついてしまった女である。

いら立つ満夫に、追いうちをかけるような事件が続く。

トマトが、アブラムシの大発生によって全滅してしまった上に、父が選挙違反で警察にあげられてしまったのである。

さらに、600坪のビニールハウスを売ってしまえという周囲の声もあって、満夫の前には絶望的な状況しかないように思われた。

しかし、満夫はあや子と、昔のように盛大な結婚式を挙げ、子どもを育て、断固として生き延びるのだと覚悟する。

その結婚式の夜、一人で広次が帰ってきた。カエデを殺して来たという。

盛大な宴の歓声が、母屋から聞こえてくる。

ビニールハウスの中で、広次は告白しながら泣いた。そして「稲刈り、頼んだぜや」と言い残して自首して行くのだった……。



●トマトを売りに団地までやって来た。これも大事な仕事の一つだ



●広次がカエデと駆け落ちしたことに、満夫は衝撃を受ける



●結婚式の当日——昔のように盛大な式を挙げる二人だったが……



たてまつ わへい 1947年栃木県生まれ。早稲田大学政経学部卒。在学中に書いた処女作「途方にくれて」で早稲田文学新人賞受賞。概念をとりきった普通人の皮膚感覚で書く文学を志している。主な作品に「遠雷」(第2回野間文芸新人賞受賞)「歓喜の市」など。

立松和平 大地の果実

トマトは美しい。エロチックであるとさえいえる。赤い電球のように、熟したトマトは流通の過程で腐るので出荷できないが、もぎって頬ばると口中に陽のにおいがひろがる。スーパーマーケットにならんでいるパック詰めトマトは、残念ながら、青いうちに収穫したものである。

だが、たわわに壁のように実っている青いトマトも手にとるとずしりと持ち重りががし、大地の精華を感じさせる。

「遠雷」の主人公たち、満夫やあや子や広次は、自らの生命の過剰さを持ってあましている。その過剰さゆえに時代と慣れあうことができ

ず、身に触れるものと軋みをたてずにはられない。だからといってやたら粗暴になるのではない。よりよく生きたいと願いながら、青春の橋をかううじて踏み渡ったものもいれば、踏みはずして奈落に落ちたものもいる。その差はほとんどないといえる。ほんの一步の違いなのだ。

トマトが実っているビニールハウスは、彼らには精一杯の空間である。冬にはボイラーを焚き、寒い暑いと気を配り、肥料や水をくれる。葉や茎の変化を鋭敏に見きわめるのは、トマトの感情を読みとることである。その空間が人工的であればあるほど、彼らの意志が

そこに存在するといえるだろう。

満夫もあや子も広次も、この大地が生んだ果実である。彼らは自分の身を飾る余裕もないほど一生懸命だ。一生懸命になればなるほど、内側からの光で美しくなる。

トマトの根が土を噛み、水を吸上げ、実をふくらませ、陽を受けてさらに果実に糖をのせる。

同様に彼らも大地を噛み、水を吸い、陽を浴びている。そんな青春があるからこそ、まだまだこの世の中は捨てたものではないと思う。とことんまでは駄目になっていないと思うのだ。